



かのし宛来いやくは幻葉の
おきしけみまのれきん
わよこしんふりめれあるぬと
まのれはまふをとりて我を
ふり業の内のけりたる
いとふあしあては
残るるを身は甲乙



既爲方とるし終るを毎の
梓子の心を沙々の形を
坪の心を沙々の形を
るを七の形を報恩の二節
るをと ぬらうたす

四世雲中菴
完来

俳諧十三條序

凡そ此の集編は本雅のいふ所の編の
かゝるものなる所の終るは寸寸の神を
るを中ひの終るは寸寸の神を
るを中ひの終るは寸寸の神を
真業を終るは寸寸の神を
硯の海に終るは寸寸の神を
月を終るは寸寸の神を

え〜し〜は〜し〜ま〜ま〜あ〜あ〜は〜は〜は〜は〜の
 高〜高〜に〜集〜る〜童〜の〜例〜の〜法〜に〜た〜ら〜ぬ〜の〜事〜
 志〜る〜御〜借〜書〜と〜し〜て〜し〜ら〜れ〜や〜伝〜ふ〜古〜人〜
 こ〜し〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜風〜御〜し〜て〜向〜後〜く〜あ〜ら〜く〜
 此〜地〜位〜も〜む〜ろ〜し〜我〜師〜三〜世〜雪〜中〜菴〜蓼〜大〜居士
 二〜世〜史〜登〜翁〜の〜命〜と〜し〜て〜守〜門〜の〜棟〜梁〜と〜し〜て〜ま〜り
 ぬ〜く〜師〜園〜を〜重〜ん〜じ〜し〜て〜し〜ら〜れ〜し〜ら〜ぬ
 せ〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜れ〜し〜ら〜ぬ

分〜て〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜れ〜し〜ら〜ぬ
 わ〜け〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜れ〜し〜ら〜ぬ
 往〜還〜し〜て〜し〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜れ〜し〜ら〜ぬ
 甲〜斐〜も〜獲〜も〜と〜し〜て〜し〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜れ〜し〜ら〜ぬ
 老〜師〜も〜産〜の〜地〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜れ〜し〜ら〜ぬ
 つ〜と〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜れ〜し〜ら〜ぬ
 句〜を〜残〜せ〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜れ〜し〜ら〜ぬ
 ら〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜る〜事〜を〜起〜し〜て〜し〜ら〜れ〜し〜ら〜ぬ

昇城しすよこに登りてししかくもれ招き懸し
 風多しといれり固く守る事おぼしめされし
 志のまじりし北城南紀四國邊境の人の事
 よそ行を繼ぐ遊囊のむら事とこいふ事
 されしおもむき固く守り又おもむきしむる事
 せしむる事おもむき固く守り又おもむきしむる事
 ちる事おもむき固く守り又おもむきしむる事
 世中のみよれしむる事おもむき固く守り又おもむきしむる事

名ばかり遠江小右衛門庵ハ孫子謀の他傳あり
 よもあまのつまみれあそびもさくし奥及五城橋外
 嘉定庵ハ後鳥羽のちりおもむきしむる事おもむきしむる事
 名もつる月亭庵ハ八代川をぬくぬのちりおもむきしむる事
 よもあまのつまみれあそびもさくし奥及五城橋外
 大唐窟ハ毛海江れす甲の後集もおもむきしむる事
 此外常れしむる事おもむきしむる事おもむきしむる事
 止観れ書かむる事おもむきしむる事おもむきしむる事

老と書ふたよりと老堂集を結い讀の流ちる
稻荷塚より子規亭といふことなき城西御所北
へくさるるせしむる地と境北門人志歩
かゝるれよりおらして行脚の形跡あるる常を
文集をゆめさるる誰かといひておらるる
寓居あるくし又ち野田のるる本を中にも
集を撰了事五十余部芭蕉の句解習の
あふち首の紙にれたる杜征南顔秘書

志と結うし讀其代袋ハ先師嵐雪居士五十回忌此
追福より櫻塚を毎旦し人左甚才今号 周竹と
判者より本然清浄の号をかく蕉翁
七十回忌より深川要津様より付塚雪碑を
供養し吐月信丈西冬 物故阿音を判者よりし
三万句集のりのおらるる緇素堂のりる事五百
有余人ありより追善の句集を事三萬句あり
あふ事ありはあは芭蕉の御供養のり

蜀川夜話五器一具草鞋傳の周竹の以師の
風流を殘せり百ぬく色梅の瘦老耳集八詠集
霞男の後遠の猿轡をさすのよしく芝蔴文集六
新古れ道深を捨ふ辛海のこころの池の家行と
はくは家の畜つり師の要るの不易をさす猿轡
遺稿の友をさすのいふも昔の老を嘆ふ寸田と水
公平の帝の国をさすのいふも昔の老を嘆ふ寸田と水
天狗同各棚搜の四集八敵も其も其人と知也

さうらう僧部同書百五十番句の柳里紀たんと書を
さうらう僧部同書百五十番句の柳里紀たんと書を
傳來の秘書十條部ありかゝる系れりといふを
考訂しと宗の至矣ともし文の魚目混珠のあやまち
さうらう僧部同書百五十番句の柳里紀たんと書を
志を自らに淡くしと葉院二牛の余とてあやまち
班象し兒をけりめ嵐高久左周行白牛雷堂吐月
阿音六箇等各判者の列をつつての盤古といふ

其の席を浮き上るは内典の道のか葉を歴
外七人の徳を孔子の起るる事と云ふは
いふに云ふに一印に師の教を顧るる事給り糸
長子らに云ふは和の徳に遊する事あり
吾れ古道を去りて去るる事あり
其の徳を師の徳と云ふ事あり
嗚呼史登翁臨滅度時の後沈守れ給る事
かゝる祥忌より一日一口の福吟の事あり

草おぼろしきけり稲妻此れ新清の徳あり大祥忌より
亡師自糸の地を此れ深川浄心寺に石碑を造立し
白牛を判者とし一方向の法念を修ふは雨の不定
まゝ星お相押しつり休廣馬より亡師の遺徳七部搜と
え〜の雷堂を判者とし一方向の法念を修ふ
死を此れ回し給ふ事あり
敷つら〜の事あり水を月二十五日祝す方十二回忌に
及ぶ事あり
俳諧十三條の撰あり抄本三條あり

につれま七師遺書十四條あり其内一條はまに
 秘しむる事あり是を省て余れ十三條を
 省れまよおわりの以上巻とせり又歌仙十
 三巻は當門下よつゝまける貴なるをほつて
 をみく懐舊の句ににんく眼しつて
 中の巻とせり又各句十三部は雀の呼ぶ
 此返るの因き新酒のまゝに錦鼓の
 よる三圍の神風は活し御堂の伊前より

中よ返の盃は對し先づの酒はまに
 祝し袖の浦より待乳のまに
 浪も枕とて故園の夢を破り鏡を照し
 懐をよ化甲は相もむせり
 汀のまにわがわつてはまに
 まにわがわつて其日八深川要津まに
 浦徑施濟のまに
 道まにわつてはまに
 夫蕉翁まにわつてはまに

嵐をかりけりせと更登あしし更登かりせと参太
わしし参太かりせと何ぞけの法延の盛まるんや
此雲をりてく新向をましく音楽を同く隆陳をま
俳家もあつくと辰程迄一諸佛仏陀梵天天
衆をけりめ参りて参りて三世法師達悉皆是
此集中の欽喜踊躍一終りんとて参りて参りて
其法を汲て將法福の因縁歲月をかくひまひて
よらに富の國のまはりてはまの法に

水雲のまはりて参りて参りて参りて参りて
まはりて参りて参りて参りて参りて参りて
ふも更参りて参りて参りて参りて参りて
師道の日く盛まるんや参りて参りて参りて
更登参りて参りて参りて参りて参りて
六月二十有五日盤吉謹序

鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり
鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり
鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり
鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり
鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり
鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり
鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり
鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり
鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり
鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり

風も夜も鳥の精神を思ふは何ぞ逃言殿外も
城も鳥も鳥の心を知るに似たり
納丁後の鳥子を待つ鳥呼は昔や河津乃
鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり
鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり
鳥籠の籠に鳥を飼ふは人の心を知るに似たり

史登翁遺稿

雪中菴蓼太編集

連の糸

史登云けつ條も附句二句の同は管をを殘せし
つり本らるる連の管をちきとねしにひびき
糸のつらきうらみけし附合しぬ句より揚句ま
いり糸のたぐひもさむく俳諧の連歌より

古人の約なりとせし禪家の回答高量も似
たりともくハ僧問趙州云法歸一歸何處
州云我在書州作一領布衫重七斤云法歸
歸一云云同る前句なり云然ハ對一云
歸一云云理座をぬき世智并こつて風雅の
風上もも並に又重七斤の云云と俗情
ありていつとももかたはつていふ云々
おもしろきを風雅の主人ももつたり云々

とんりの梅さし

海しん雲よりおれい入

ふれ者のきこいあふら

おんくさるハ八日

いんれいおよん軍のたふさ

あふ庵よきおていんや

命しんお撰集のめり

蓮のいれ連綿な事限あふし

五尺の葛蒲

登るべし條を發句附白にむに男物をぬる
まらふれいしおのちみ尺れあやめよ水さそいさ
かよよまよとま指のたまり合まの情さうらまた
にばかまかこりこりいれい彼理をたつてま
人の口上いよと右司の耳よういよいあひれい
上いよまよとらまを能守とせ枝翁行節のは
伊勢の登るう子をねよのさいりたさくむい

まらふれいしおのちみ尺れあやめよ水さそいさ
かよよまよとま指のたまり合まの情さうらまた
にばかまかこりこりいれい彼理をたつてま
人の口上いよと右司の耳よういよいあひれい
上いよまよとらまを能守とせ枝翁行節のは
伊勢の登るう子をねよのさいりたさくむい

かよよまよとま指のたまり合まの情さうらまた

にばかまかこりこりいれい彼理をたつてま

人の口上いよと右司の耳よういよいあひれい

上いよまよとらまを能守とせ枝翁行節のは

ふしよむのむらさきもよみしるすれと菊のあかり
換ふ風もよみしるすれと其の園もよみしるすれと
とよむるもよみしるすれと

夜の柱

登るは陳ちたふくもよみしるすれと
都よりかゝるは灯のちりけりもよみしるすれと
登るは並一柱もよみしるすれと
とよむるもよみしるすれと

登るは並一柱もよみしるすれと
都よりかゝるは灯のちりけりもよみしるすれと
登るは陳ちたふくもよみしるすれと
とよむるもよみしるすれと

けりらるるふくち皆古事古徳の糟粕とぞれ
浪川の流るるを

流るるを何れにぞん

あゝいふは長ぶらばらさるる宗祇

楚辞九歌曰悲莫悲兮生別離

あゝいふは長ぶらばらさるる

稲女あふらひのちりり

發らのくあはれはるる

西行法師世をいひとくあはれはるる
鈴屋のふせをいひとくあはれはるる
かゝたふひ古人のいふもあはれはるる
習はけいり

乞食袋

登云け一漂ち似踏をせん人活るる
よゝんをいひとくあはれはるる
天地のあはれはるる

帯本る夜のあけあけの海にうれしき花
もこころあはれにふりかへしむる者

ふる月は卯波岸にやちかまの

はらうらまをゆめ月の波をゆ波といひる月を
たはさといひこころを思ふはなれはらうらま

逆茂木

登云は一原ハ岸とよろともむ時切者初心をなす
とよよもあまのこころを思ふはなれはらうらま

兵の戦場より城壁と責めたる人逆茂木を
引のけく跡をけしむる人よ安くと衆人をあはれ
勇智を武士といふしたと一歩陰をうらま
一とれさるるうらまの軍の跡もあはれ人の
ためあの手あはつた忠信をわらふとや継代乃
附りもかあめとくふのも物をねいこ前代も
とこころを思ふはなれはらうらま
一かこころあはれ十人の陣をさして百韻

奥にても付八十人たれ百韻よく百韻又二句を
 仕立よこしあつしはこれに附句と述句ふかしくし
 花門の附句は只しきくしきくふうしそ人情
 二句つてけく二句あふお付ふ時節を細く心持よく
 述句の句くこれと臆病の武士は逆巻本道つ糸
 似より連綿したに附句とさくこと述句といふは
 述句にたれく附句のはまりそしあるよさしりのを付
 きのまるといふ述句といふお述句といふおを考て丸

功者の入つるお、先師の傳書よし奇仙一ニニタお
 百韻十たはらるるお、述く山姥の編り色即
 是空の編りよ佛法あきく世法もむ怒あれく
 善提めらし仏あれく成生あり成生あし山姥あし
 はくく柳を嫁ふさくこれあつのいろくとい
 述句の秀述まりともあふおよは又句あつらんよ
 一体の伴そともあつてあつてあつてあつてあつて
 述句ハ教くまふ力もも瓢集よ

園守此より打こゝるまはしむるは向めはみら
まゝの羽のよたをきこゝはなまを大塊からん
して羽六うられ尻うらむはまゝをさしはる
と射ふまらしてはひきこりおのこくよの光
立ち遠茂木をあらけり射らむらとせむはひきこ

雲雀の巢

登云けし原を君子ハむとを勢や雀をまきし
巢をうらむしは虚空よあそむもかのう縁を

かくの俳諧も又かくのこゝ花實お對まけも
世とれとやうも雲雀の句のふかや雀のやう
遊あつたをいふ花さくゝ実を巣をまき
おゝ底意よもは本情をうらむしや

雲雀のやうも外中もある

つれなきり物まゝの大將依のそた

まじりし家園の風をうらむもふかや
はれと実をうらむも雲雀のうらむ

里の道

登云此一條ハ素よりまゝにせしむるべし
事本をきくはしむるはむかひに
名亦或ハ神社佛図行要の亦をさるるは
却りたりし一守他傳の執行も左の
くはむかひにむかひにむかひに
枝葉の目録にむかひにむかひに
的なきくしむるはむかひにむかひに

出さるに受傳はされしむるは執行も
かゝるはむかひにむかひにむかひに
終よ切書の名をむかひにむかひに
早の書なるはむかひにむかひに
書の書の執行者はむかひにむかひに
とむかひにむかひにむかひに

錦綴

登云此一條ハ今も尚ほむかひにむかひに

おもひもたはらへし一たよかれ漸くさあつた
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
いふも又流れたるさうさうさうさうさうさう
俳諧よよきさうさうさうさうさうさうさう
文んともし一層破色のとこひつたむの料理乃
破其辛苦くとも思ひ切くさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
経波の宗因武江より向のさうさうさうさうさう

こゝに海食一さうさうさうさうさうさうさう
法東の子句ありて其の中何れもさうさうさうさう
梶原の匠櫓の遠近形一さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
三句もたはらへし一たよかれ漸くさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
おもひもたはらへし一たよかれ漸くさうさうさう
おもひもたはらへし一たよかれ漸くさうさうさう

河よおききこひのあいらむよ此能く牛若丸乃
一化を業一強ましくちまふまふあし

株貝や覚も牛若丸まふこらよ

殺野のやまふまふこらよあし
白化のまふまふこらよ

あらしや一日つれまふも秋の風

もあ人の情こらよあまふこらよ探さるるを
おのこらよあまふこらよあまふこらよ

ら下し余情を強まふこらよ

吉瀬の新水

登云塔一系ハ行まの家の後まふこらよ
水よあまふこらよあまふこらよ
業よあまふこらよあまふこらよ
あまふこらよあまふこらよ

あまふこらよあまふこらよ
あまふこらよあまふこらよ

河ハちよまきりありあはれとていふも初きりうらみ
あはれとていふもあはれとていふも感あはれとていふも
ふれと初音れ僧止こ今の世とていふは三井寺
永縁後いの本ふうはる又い音の耳はあはれ

あはれとていふもあはれとていふも

十日よは十のいふもあはれとていふも

うらみとていふもあはれとていふもあはれとていふも
糟粕をさあはれとていふもあはれとていふも

大津の尚白

そり又あはれとていふもあはれとていふも

こは他徳のつゆとていふもあはれとていふも

あはれとていふもあはれとていふも

堀橋

登云此一條ハ橋をまぐ溝海を思ふ業よしとていふも
あはれとていふもあはれとていふもあはれとていふも
いふもあはれとていふもあはれとていふも

福をうけいひを思ふは人の徳なり
端なくも世に世をくまひて
ゆるよよは陽つとむるこし

こしとわ後よこせしる様の色

翁け果且を信賴しりこるる翁は海人のいふ
昨のこしは信賴しりや翁は毎日を信賴し
何のがたれ事つあんと考ふはまじりしりや
けつを志をりしとて道よ入へし又楠正成のいふ

年廿四五の若武者よりよはしる軍止る先ては
大膽病の士こまるとれまといふも是ふは諸武者
とつれて敵中よかゝるは幸きめりし程の事なるの
人ほつ切つたりとて年よもまるとりありしは
大なるいふとてはたしとてかゝるは

序

雪雲此の白牛老滝と風月の奴も来り吟席を
 欠ころるあまの世にけしきも常信もあまの
 中も月と一物のとれぬけしきも常信もあまの
 句くはしきもも國きしきもあまの
 稱語しきもあまの
 貞治家も蕉門の歌拾もあまの
 深くはしきもあまの
 秋の終りもあまの
 家のあまの

能

長安の士女春時よ寄成花と水相闘一縁負をまじし
 散て花合をて結かけをむむるあり是をさる香のふか
 方を勝と定しハ重く千金を以て名花を某を小極る合の
 備よまらるる初来より馬車より人々出でて花を尋ね
 是を探も喜の宴とふ又華清宮より楊貴妃と立列留を立
 花を以て侍女より人々の試しし是を華清宮の風流陣
 とつふあり ○花園 日 汝傘の通よりてりし字はけ
 り花園ハ妙なるも花し山の在の名も人々花よあり
 花園院ハ正花よあり ○花の山 日 花山名ありは必ハ唐ハ花
 咲とり白むるありて正花よありし 汝傘の返り

○花畠 日 植ゆまるとまじ ○ 花の香 日 花の香し油の
 香西よ好あり ○ 花の白 日 花の白く油の香ハ
 七句好あり ○ 花むし 日 苑ハ花のえり又花像の
 紙より丸くして行道の因か花のしりとりハ正月の餅
 菱花むしりてありしれハ花を御傘より花のむしり
 難の後あれハ芭蕉門の式よりゆきて奉を付しを植ぬ
 少く二句あり試のふりハ海より及りあり ○ 花をゆす 日
 御傘よりハ法華經の水陸草木の四種の花をゆすむつ
 とハかなれハ喜ハ花を植ぬハ花の名ありハ花
 わり花をゆすハ喜ハ花を植ぬハ二句の花をゆす付し

つづつふらつれもぬり

右正花より甚なると寫對せしむ花の目よりたつ

植物よ二句去りし類も二句とく

○花の宿 花より 花の隣 口 ○花の窓 口

○花の戸 口 ○花の扉 口 ○花の席 口 ○花の庭 口

右正花より春く丹心くさふ植物よ三句去草類よ二句をてし

○花の主 花より 人倫より 口 ○花の女 口

○花のほろ 口 ○花守 口 ○花賣 口 ○花作 口

右正花より春く人倫より植物よ三句去草類よ二句をてし

○花の縁 正花より 春く句節よりて春くもよ一花の

より知人もよ又ハ花のくもひもその句節よりハさふ植物よ

三句去れ一とて花の縁と廢更れ句よりハ植物よ類も

二句去つ一 ○花の姿 口 ○花の顔 口 ○花の唇 口

○花ののり 口 ○花の肌 口 ○花髪 口

右正花より春く植物よ二句去草類よ三句去但人の

せうくもよさふハ花のくもひもその句節よりハさふ植物よ

○花衣 花より 衣類より 口 ○花の池 口 ○花の波 口

○花の衣 口

右正花より春く植物よ二句去草類よ

○花の都 正花より 春く ○花路 口 ○中華 口

右正花より其く植物は二句は但花の形眼前花のみを
 流るる句ありし一季の發ちより地をく一本の同れをのり系
 せりありしつれも木を流るるのさしをく植物は三句去し
 ○花の踊 花より 沛傘よとちりある 盆の踊よりよとちりも
 花よりとちり踊よりもたまたは正花よりよとちりも植物は二句去
 ころとちりとちり踊より花の下より踊句終りし植物は
 三句去し一 盆の踊より登りて花踊よりよ句終りし秋の正花
 ありし植物は二句去し一花の踊より其く盆踊終り ○花心 口
 ○心の花 口花は心よりあり ○人の花 口
 右連歌新式より正花より其く植物は二句去し一蕉門下

よし植物のよ二句去りし

他の季の正花

○余花 初より初花よりよとちりも ○若葉の花 四月に
 昔葉の花は春より ○花の射る 花よ射るよとちりよとちり
 郭公喜よりよまの流るるよとちりよとちりハ昔葉のよとちり
 流るるよとちり ○花火 秋より植物はありし夜分を是と
 花より用より師傳あり ○花相撲 秋より古き能事よ
 ころよとちりハ時分よありし一 相撲を催し之物人より此れ出
 物を花より用より名まよとちりしとちりハ相撲の方流りれとち
 ありし一 花よりよとちりよとちり花より花より植物は二句去りし

花蘭より始りたり ○花燈籠 秋の夜分は植物より
他より始りたり ○かたし花 年より十月福袋
ありし書より正花 ○餅花 十二月より御筆小
植物より二句をとりし本竹の枝より付るなり又能くも信り
ありし正花なり

右の外は他の季の正花古より他よりなりきり近き夏の
又書より入又ハ他より他の季にありし書より他より花より
他より物より又ハ花の比を失りたりなり之より正花より
秋の季より加りし正花より成りたりなり

雑の正花

○仰り花 正花より 植物より二句をとり ○絵の花 口 植物より
ありし古人よりくの後ありたりとも花より字の称あり
○花むし 口 仰り花より始りたり ○花立壺 口 花の
絵ありし書より絵の花より始りたり ○花鞆 梶原景季
籠より梅花を扱ひたり此ありたり吳浚われども太り
○花形 口 御筆より正花の絵ありし書より小鼓の花形より
していなり正花の絵ありし書より御筆より句作の扱ひ
下りし書より古門人より呼りたりたりたり晋子黒梅の
題ありて御筆梅より其の潤ありたりけり此より味へし師
傳より尋りたり ○花塗 口 ○花かき 口 鞆敷花の

押花あさり花の花はほしし ○ 季の花香 口 食れ

りつし ○ 花子の娘言 口 人偏く ○ 花鯉 口 食類く

○ 燈の花 口 夜ふりり句辞よりつとくをさうくし

○ 花毛遣 口 ○ 花せん 口 ○ 花筵 口 花を織る

句辞よりハ植ゆよ二句を花の下よあさる辞よりハ植ゆよ

三句をさし是ホハ一座の樹よりさし ○ 花塚 口 人偏く

○ 花聲 口 人偏く花塚花聲ハ句辞よりつとくを

植ゆよ二句をさると御筆の難の説われも蕉門下より去る

ゆきん附よりつと ○ 河の花 口 植ゆよ二句をさる

○ 花ちき 口 ○ 声花 口 ○ 花ちり 口 小やとる

当の字より上端あれと花やとゆとてつとくは蕉門

下花よりさつと花よ目につれも花よ對してハ偏くも

乃とれつとる

右二十一品につれも植ゆよ二句をさり難の二字を添へる

花前よよて及冬この季よりハ花をけつとくは

さしとけの附よりさるをゆきん附よりハ花をわかれし

つとく蕉門の樹より是ホを新吉の若みよりさし

○ 花紅葉 口 花よりつとくをさるがつとくハ難よりハ紅葉よ

系ゆされくさり句辞よりつとく植ゆよ二句をさし又ハ三句も

さし ○ 花實 口 是も前をさし

花

正花附合

○花 發句 昭中三すくも花の句長し河のやうに分ち
まゝくさ花の白きくさ

○花 篠を付る えさると文切のふと寸和秋も花の紅と
梅をいむさけいさくくと附きて前句と句意はさきうそを
おとせし〜連歌も梅人梅戸梅鯛さ〜或は浅黄櫻梅梅
と附る〜貞徳の流も前句梅めらるゝは附て苦くはむ
發句 さうむとくし花もいさし首の骨 宗因
ワキ か〜け〜梅もいさく〜人
梅人〜いさく〜名され〜梅人〜いさく〜丸梅のわりの

人〜ら〜ら〜め〜さ〜り〜前句梅あり花也梅人を付る

發句 辛崎のねと花も〜梅も〜 芭蕉

ワキ 山〜さ〜い〜〜を〜と〜る〜雪雨 尚白

か〜ら〜〜付〜〜中筆も前句の正花梅も〜句さ
い〜さ〜よ〜さ〜〜せ〜り〜は〜梅も花を〜梅付く〜句さ
あり案よ辛崎の句に梅あり〜さ〜も〜さ〜〜梅も
梅を付〜〜さ〜〜前句梅さ〜花も〜梅付〜苦く〜
〜〜〜

○櫻も花を付る 程の大切寸正花を前句の梅も引付
ら〜ん〜中〜か〜され〜前句の梅梅貝梅戸さ〜似せよ

きくく笑くくくの花を付くし生植の梅きくく花衣花心
花嫁花舞き付くし是又花の梅を付くし梅の梅
しよしよ古来連歌よ「梅は梅よりしつれまのしよ
句よ「花さよふあしよのち後やしよしよ梅の梅さ
発句 梅よりしよふくしよふれだんさ
ワキ 梅 さよこしよく花をさよれ 比 守武
發句の犬梅の吠つしよふくしよ梅よりしよしよ
わのれだんしよ梅と句をさよしよしよしよ梅の梅の
句よしよ梅と付くしよしよしよ梅の句よしよしよ
句よしよしよの梅を付くしよしよ連歌よ

發句 さよ梅をさよしよ梅の梅 宗長

附句 梅をさよしよ梅の梅 宗祇

紹巴の梅は夜さしよ梅をさよしよ大梅を梅
くく梅さよしよ梅の梅 故人皆夜ふさしよ梅
三條西殿の發句よ「梅の梅は夜さ梅の梅さしよ
しよしよ梅の梅さしよ梅の梅さしよ梅の梅さ
あれしよしよ梅の梅さしよ梅の梅さしよ梅の梅さ
句の梅さしよ梅の梅さしよ梅の梅さしよ梅の梅さ
句れしよ梅の梅さしよ梅の梅さしよ梅の梅さ
梅の梅さしよ梅の梅さしよ梅の梅さしよ梅の梅さ

花

つるし治るふくむの人の事たしむるはあめ
 いしつふふふふふふふふふふふふふふふ
 めしつふふふふふふふふふふふふふふふ
 事なる目なることしつふふふふふふふふふ
 同むふふふふふふふふふふふふふふふ
 一府のふふふふふふふふふふふふふふふ
 花のりつふふふふふふふふふふふふふ

○花の吉野とて附す事極ふ 花の吉野とて附す事極ふ
 吉野の吉野とて附す事極ふ 龍田茶の吉野とて附す事極ふ
 吉野の吉野とて附す事極ふ 龍田茶の吉野とて附す事極ふ
 吉野の吉野とて附す事極ふ 龍田茶の吉野とて附す事極ふ

暁く打紙も對妙あつて吉野の花に付るう
 是はいつくさりを花初はあつて吉野の花に付るう
 吉野の花に付るう 吉野の花に付るう
 吉野の花に付るう 吉野の花に付るう

○花の句も旅の字 沖傘の句も花の字も旅の字も
 旅の字も花の字も旅の字も 旅の字も花の字も
 旅の字も花の字も旅の字も 旅の字も花の字も
 旅の字も花の字も旅の字も 旅の字も花の字も

○梅海棠利子ホ 花を附す事極ふ花を附す事極ふ
 花を附す事極ふ 花を附す事極ふ
 花を附す事極ふ 花を附す事極ふ
 花を附す事極ふ 花を附す事極ふ

花の定座の事

○花の定座長句を定座とす ○百韻ハ初裏十三句の二此
裏十三句の三の裏十三句の各残の裏七句の ○歌仙ハ
裏十一句の各跡の裏五句の二と右の二は裏の二段
の終長句終末の二と云ふに依りて

俳諧初

寶曆甲申正月八日於為侍房初を満傳後座

蓼太口述

氣服記

一 穠月夜長竹小ぶち折て世といと静まり吐月
飛鯨雷雲出座難候の折りく同て云今長江此
百負或ハ奇仙をよよ満傳れり一連礼より數た
初を定座の二句乃至廿句餘具とく
中一の二句の終り始りたる事

一 善言濫觴をまじはるは是ハ高直の句教をせんため
 二 好まればよの能き人吉格よまよふ事
 三 しくもり物もま田舎もしくいあけよあまは
 四 中ち先をたぐふ十負の百負の下界の文章好も
 五 畫多ふハ略せしむるはけり多しむるは
 六 濟ておる序とと下より勅ふるさあ及まのひや
 七 一序よりま百負の中へく百負四折よ古人の
 八 配りせしけりまは深ふの意味を事くはれを
 九 じまの附置さるるは法おきせし後河ふよ

其角の息をうたは百負お持の人ありまき筆の
 より例の案思はれ句福りくく其角は息
 一 一 奥の書者

百負余典の後からけり由連成子句余りく百
 負のほ又ハ由成りよりけり三或ハ表計も句数
 一 一 各一 道流のい... 書きよす... けり高直は

きりりけりもあはれ日記もてかき

正月十八日午後

一 同云句よ新右の境かき彼あはし是ハ古
 二 一とも皆人の物なりて新右を利を能

桐

初歌

花 杜國

一回

一 着

何

一 嵐

一 着

一 着

一 着

一 着

一 着

一 着

月夜

浦山の花も序よりさかす

かこしつゝ物事を交くなす

是れも高き島への草花のさかす

卯月 卯月 六月 廿日 卯月 卯月

同七月十八日 卯月

一 嵐をたふさぎぬをけしつゝさかすの節
梅より遠く高き島への草花のさかす

一 暮云の影のさかすの節
卯月 卯月 卯月 卯月 卯月 卯月

いづれもさかすの節
残雪のさかすの節
さかすの節
さかすの節
さかすの節

一 同云の節のさかすの節
さかすの節

一 暮秋のさかすの節
句よむさかすの節

寸土寸金のけはね物あまをさめしめておきやま
あまのよつ感分なうちとまゝにあらと
わらうゆかりあのかたは風雲を借得とて
あまのうら

一 首菴中の浮もまゝにさる

同八月十八日金

同九月廿一日金

同九月廿一日休

同月十八日金後雜續

一 菴より近きわゝ宗近帯り松の嵐よつた物さ
文中よ紅涙し首を海へとあまをさる紅
涙ハぬれを粧ひし人の涙さしてハらぬま
貴ハ大ハ化粧しるると笑ひぬし或人さ
東渡老人一なるさる返しは折々札と
集の由存ありしを何となくんしを
たがしあ

く丹まのの色あそむるを
せしち新田にさるぬ

わんまゆしこし紅屋うきれくぬ河をぬり粉
糖の通るありとらん可願多太も蒸けれぬあぶりし
あれと蒸極は信のふれとちあかりはまきん風家
ぬきあしふかすりま

一回今おきていふ或ち八句をいよへ紅屋た
神頼意のあらしもゆきいふこも古式
あらし事しや

一善は古式はふねの事いふあらしは
ふねはあらしもあらしはあらしはあらしは

あらしは神頼ふゆきはこも古式は
古人のあらしはあらしはあらしは
ぬきあらしの日はあらしはあらしは
あらしはあらしはあらしはあらしは

同十月八日會

同十一月八日會

同月廿一日初會点五白負興行連之十三人老師
あらしは

明和二し酉正月八日初會後會

同月十八日廿一日お慶合

同三月八日今後

一回を蕉門の人此常流は俳諧の流の清き
 乃ち有りたるハ廿年の枯庵へ戻りて
 かくしてやうかきぬ何なる清き何なる
 ことし清きことやまるとも清きこと
 平く枯庵よりあひをきし生涯頂をき
 たるいことなればまじけお富ふ

一 善一大車の正なるれは作る家おのの程を

なりて中々宛めくふあなり先ハ
 なる道者なること一長吟雅の地まれ
 け清くありてやま百練一ことま
 ともな彼絶頂はまれ一字を
 増くこの平原の地あり
 清きことなる

清滝

清滝のあり及よ
 清滝のあり及よ

清流の流もあつた夜の月

清流の流もあつた夜の月

清流の流もあつた夜の月

清流の流もあつた夜の月

清流の流もあつた夜の月

又附句

かきつりつげし

しそ負の風

福の持ち女

何れも男

けいふよあわくち男

運送るり三句

花の句よ十牛

沈句也

同三月十八日會

同月廿一日會

老婦和詩の思

同霜月十八日會後雜談

一 夢の俳諧と老後のたのしみと病のたのしみ
 ちかぶちやうくきかきいふは道きうりあゝ老人
 ゆゑに貫絛縹とるもいふはあやの何れいあ
 あゝはに縹縹ふとて人の何れとて我と我ふ
 けいりいふはきふかりにけいふふふふい
 人への文をいふは後悔先よたうは吾も
 かきいすい貫絛縹親にふあゝぬはゆふあ
 とも老後のたのしみあゝいふは本をいふ
 ちかぶちやうくきかきいふは世をいふは親に

のこまのてい

一 夢の貞徳の神日記と大の連歌と
 何れいふはあゝいふはあゝいふはあゝい
 あゝいふはあゝいふはあゝいふはあゝい
 ちかぶちやうくきかきいふはあゝいふはあゝい
 いふはあゝいふはあゝいふはあゝいふはあゝい
 あゝいふはあゝいふはあゝいふはあゝい
 宗紙

早も 継徳様は けりあしし

一 又云連弁は多うたてくへいしやをいひて
花のうらけ家のとくしんや 継徳は

一 又云まぶ歌は源氏物語に付る事源氏今物語
をいひて人ばよふにやうにされといひて
よもそれをうつううしたくも綿の切れとし
詠得も奇物語とて交へてまはれ

一 又云句の流行ハ幼少者の芥より新ね絶絶
本紙標は茶よりあつとも 継徳は

一 又云美人も醜人も顔の形うらくは七穴は
いしも色あひを介もまよふもふりあ
句れとよあひもかひのし 初人の入をいひ
魚し

同十二月八日納言馬五連丸九吟
明和三月戌正月八日初念後座

一 同云系太政のち地も継徳はあつあつといふ人あり
ち地もちよるくくはつ

一 若大なる癖をきり何そ扱の玉も継徳の言

つゝの事あつたおはるの草色並の戯らふとる會
 遊遊も都のちよあつたのそつれつとる會人志
 備座つてつれつとる會つとる會つとる會
 時ふあつたつとる會つとる會つとる會
 それつとる會つとる會つとる會つとる會
 立圃も皆お人つとる會つとる會つとる會
 名人のあつたつとる會つとる會つとる會
 且つあり享保のつとる會つとる會つとる會
 非九種継一辨のつとる會つとる會つとる會

大に度あつたつとる會つとる會つとる會
 耳もあつたつとる會つとる會つとる會
 大に度あつたつとる會つとる會つとる會
 後つとる會つとる會つとる會つとる會
 つとる會つとる會

習つたつとる會つとる會つとる會 淡々

去つたつとる會つとる會つとる會 夜 五

神もあつたつとる會つとる會つとる會
 風もあつたつとる會つとる會つとる會

菊のよついでにけりては河舟のくふふりまり席乃
文中を味あはよ東武よりあちとけりては
つらむにわあよけこのよひさあううせを
信てあはれまのえまきとあはれ海とく
親おとまきとく「これ」や橋よさや
とらふ白きまの一回六街やきり賤のそ
くらしう一ちを今よあはれとらふや
河をうりて依一とらふは田舎とく
結るまよ正月氏子のくあはれとくは
敬信とく

きつげは縁を更く荷きよはだ糸のさつてせめて彼
別南神道の味あつて料は大意を一村の教信よす
あつて又お油紙のためとく小麦とくちり
きりやあちとく縁とく糸治のあちとく
さつてはとくとくとくはとくはとく
一いつらよ一人のうをせし習のり

地理 親念 貴賤 老若

師説くまふをけりては句のあはれとく
あつては山やちとくけりてはとく

公翁

けふれよのや文字者まゝとせし集あらしむもや
 文字を日れやうよきけしし先は家内り終の
 比福浦よ一高しとけを思ひ出せしはあつこ
 山をまきくらしと福浦をまきくらしやれまき
 ありし山やふく浦と首をのらしとれまき
 ちうれく句の骨柄まきりまきしとれまき
 る句に又と格別まきりまき地まきしとれまき
 句もあましとれまき

一回の格あま集り終の集つてまきりまき

とれまきしとれまきしとれまきしとれまきし
 又集中の句よ

おのれおまきりまきりまきりまきり
 其南

一 昔けま集り白集のうち道衣とて秀まら
 盛まらけをまきりし文中の大和奇好せたよ大臣
 まきりまきりまきりまきりまきりまきり
 けまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 けまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 けまきりまきりまきりまきりまきりまきり

同二月八日會後

一回げはれらるる梅の鏝の付らるる
 とく 照雅を寄かきし梅花一鏝のちつあ
 りふ清きくかふるも受めたるは
 相違よりいふ事あり

一 昔いふもいふも梅のほちちも
 わるもさるも又いふも古人の梅の
 たるありを照るれば風情も
 ちよとすもあはれ花もえらるる

いふも鏝するのむもさるの
 ありとさる梅れ風情あり

さつとさるもいふも
 新造の梅れこれの
 奇よもいふもいふも
 く川 鱈や界もいふも梅れ

是様も善集のりなり古人の
 一回はらさ昔法印は
 ともいふもいふものあり

